

地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」 —粉河を歩く：河岸段丘・粉河寺・児玉家・山崎家—

【研究代表者】山神達也（和歌山大学教育学部）

【共同研究者】海津一郎（和歌山大学教育学部）・山口康平（附属中学校）・川嶋里枝（附属中学校）

【活動の概要】本共同研究では、本学部社会科専攻の学生と附属中学校社会科とで共同して「歴史・地理探訪フィールドワーク」を継続して実践しており、本年度は粉河を対象とした。具体的な活動として、まず、本学部社会科専攻の学生とフィールドワークを行い、その成果を踏まえて地域教材を作成した。その後、その地域教材を携えて、学生の案内のもとで附属中学校の生徒とフィールドワークを行う予定であったが、担当者の体調不良や新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、フィールドワークは実施できなかった。本報告では、粉河を対象とした地域教材の作成過程と内容を紹介したのち、本共同研究の成果と課題を整理する。

1. はじめに

本共同研究では、本学部社会科専攻の学生と附属中学校社会科が共同して「歴史・地理探訪フィールドワーク」を実践してきた（表 1）。「歴史・地理探訪フィールドワーク」は、社会科専攻の学生の案内のもと、附属中学校の生徒が地域を見学・観察・体感するものであり、学生は案内に先立ち、対象地域の地域教材を作成する。地域教材の作成とフィールドワークの実践は、海津（日本史）と山神（地理学）が共同で担当する中等教育エキスパート科目「社会科地理歴史分野学習内容構成論」（学習内容構成論）の一部をなす。一方、附属中学校では、生徒のフィールドワークへの参加は任意であり、社会科の山口と川嶋が中心となって、参加者を募集している。

本共同研究では、まず、本学の学生と下見のフィールドワークを行う。次に、下見の成果を踏まえ、学生は学習内容構成論の授業で地域教材を作成していく。この段階では、何を取り上げるか、内容に誤りがないかなどの点から、海津と山神による指導が行われ、教材を練り上げていく。地域教材が完成に近づくと、中学生に伝えるために必要なことは何かという点から、山口による指導が行われ、教材のブラッシュアップが図られる。最後に、地域教材を完成させるとともに事前の打合せを行い、「歴史・地理探訪フィールドワーク」本番を迎える。

以上のような本共同研究の活動の第 1 の目的は、学生・中学生ともに、現場を見学・観察・体感して学びを深めることの楽しさやその重要性を知ることにある。そして第 2 の目的は、教材研究の重要性やその成果を児童生徒の学びにつなげることの難しさを教育学部の学生に実感してもらうことにある。本共同研究を通して教育学部の学生が学びを深めていくが、それは中学生の案内役を務めることで得る部分が多い。こうした活動を実践できるのは、共同研究者の山口と川嶋の協力に負うところが大きい。

本年度は、粉河寺とその周辺地域を対象として「歴史・地理探訪フィールドワーク」を実施する予定であったが、担当者の体調不良や新型コロナウイルス感染症の感染拡大などにより、実施することができなかった。本報告では、地域教材の作成の経過を整理したのち、完成した地域教材の概要を紹介する。最後に、今年の共同研究の成果と課題を整理する。

表 1 近年の本共同研究事業で実施したフィールドワークの概要

年度	地域教材のタイトルとフィールドワークのルート	実施日
令和3年度	粉河を歩く —河岸段丘・粉河寺・児玉家・山崎家— 粉河駅～藤崎井用水・小田井用水～粉河のまちなか～粉河寺～中山地区	
令和2年度	熊野の果てまでイッテQ！～入口編～ 海南駅～一の鳥居・祓戸王子跡～藤代神社～藤代坂～藤代塔下跡・地藏峰寺	
令和元年度	貴志川線に乗っていこう！伊太祁曾神社と奥の院 伊太祁曾駅～伊太祁曾神社～平緒王子跡～四季の郷公園～伝法院・丹生神社	2019年12月15日（日）
平成30年度	二里ヶ浜の秘密を探れ!!! 西ノ庄駅～河西緩衝緑地公園～磯ノ浦～磯浦八幡神社～射箭頭八幡神社	2019年1月26日（土）
平成29年度	秀吉の太田城水攻め&花山めぐり 日前宮～秋月～花山～音浦分水工～出水堤防～大門川～太田～太田城址	2018年1月20日（土）

2. 地域教材の作成の経過

本年度の「歴史・地理探訪フィールドワーク」では、粉河寺とその周辺地域を対象とすることにした。粉河をフィールドとしたのは、以下の経緯によるものである。

附属中学校で山口が担当する学年に児玉姓の生徒がいた。その生徒と雑談する中で、祖母宅が粉河だと聞き、「もしかして児玉仲児の子孫？」と尋ねたところ、本人は「何か有名な人がいると聞いたことがあるけれども、よく知らない」とのことだった。後日、その生徒が祖父母に話を聞いたところ、「先祖は粉河寺を創った大伴孔子古で、室町時代に將軍から児玉姓をもらった」とのことであった。その後、歴史の授業で児玉仲児を扱いたいので取材してほしい旨をその生徒に伝えたところ、生徒の父親に粉河をご案内いただくとともに、児玉本家の当主をご紹介いただいた。当主の児玉光男氏を訪ねてお話をうかがうと、光男氏は附属中学校出身とのことで、伝来する資料や古写真を快く見せてくださった。下見も含む今回のフィールドワークでも、児玉家の本宅や墓地を見せていただくことをご快諾くださったため、粉河をフィールドとした。

フィールドの選定後、学習内容構成論の授業において、新旧地形図の読解をはじめとする地域資料の読解を実施した。10月16日（土）には下見のフィールドワークを実施し、「歴史・地理探訪フィールドワーク」での学習内容を検討するとともに、実施日を12月18日（土）と決めた。その後、学生は案内する内容の担当を割り振り、各担当の学習内容に関するワークシートの作成に取り掛かった。10月末から12月上旬にかけての授業では、海津・山神の指導によりワークシートのブラッシュアップを継続するとともに、担当者間で内容の調整を行った。12月10日（金）の授業には附属中学校から山口が参加し、中学生にどのように伝えるのかという観点から、ワークシートの構成や内容について助言した。その後、ワークシートのブラッシュアップを継続した。

フィールドワーク予定日の前々日になって山口から連絡があり、体調不良のため参加できなくなったこと、川嶋も部活動の引率で参加できないこと、附属中学校の教員が参加できないのであれば中学生を連れてのフィールドワークは実施できないこと、が伝えられた。また、1月は山口と川嶋の日程調整がつかなかったことから、中学生を連れてのフィールドワークの実施は断念することになった。こうして教材作成に携わった学生がその成果を披露する場がなくなったため、海津の講義を受講している1回生に呼びかけて、1月22日（土）にフィールドワークを実施することにしたが、こちらは新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、実施を見送ることになった。作成した各班のワークシートは1月27日（木）に集約し、地域教材を完成させた。教材作成に励みフィールドワークを楽しみにしていた学生が多く、たいへん残念なこととなった。

3. 地域教材「粉河を歩く―河岸段丘・粉河寺・児玉家・山崎家―」の概要

本年度はフィールドワークにタイトルを付けることを失念したため、キーワードを並べて地域教材のタイトルとした。本番のフィールドワークでは、図1中の中央下寄りの粉河駅を出発し、点線で示した経路をアルファベット順に歩く予定であった。完成した地域教材「粉河を歩く―河岸段丘・粉河寺・児玉家・山崎家―」の概要は以下の通りである。なお、各項目末の〈 〉内に担当した学生を示し、〈 〉がないものは教員で作成した。

- ①参加募集のチラシ（1-2 頁）：粉河寺縁起絵巻・粉河寺の大門と本堂・児玉仲児・粉河祭の写真を示し、フィールドワークの対象地域に関わるクイズを出題した。当日の予定や参加申し込み票も付してある。
- ②歩く範囲の新旧地形図（3-4 頁）：地理院地図と今昔マップを使用し、歩く範囲の新旧地形図を示した。旧版地形図では河川・水路を青で着色してある。
- ③粉河の地形を見てみよう！（5-6 頁）：地図記号のクイズから始まり、地図の縮尺や等高線の解説が続く。最後に河岸段丘について解説する。地図記号のクイズでは、寺と墓地という訪問予定地と、近年になって数が増えて新たに地図記号となった老人ホームを出題した。河岸段丘を含む地形の説明は、地点D（図1中、以下同じ）の粉河橋や地点Eの小田井用水など見晴らしの良いところを中心に行う予定であった。〈立石・門脇〉
- ④小田井用水―先人たちの知恵の結晶―（7-10 頁）：中津川を横断する藤崎井用水（地点C）を観察し、伏せ越し（逆サイホンと呼ばれる）を理解する。次に、世界かんがい施設遺産に登録された小田井用水について、建設を勧めたのが徳川吉宗であり技術者として大畑才蔵が抜擢されたこと、江戸期の測量や施工の技術の高さなどを説明する（地点E）。最後に、伏せ越しの入り口と出口が近い地点Cの藤崎井用水に対し、河岸段丘を横切る小田井用水は地点Eで落とした水が次に出てくるのが地点Sであることを説明する。〈玉井・野口〉



- <訪問予定地>
- A: 粉河駅
(出発・解散の地点)
 - B-C: 国道24号
 - C: 藤崎井用水
(国道よりやや南)
 - D: 粉河橋
 - E-E': 小田井用水
 - F: 子安地藏尊
 - G-H: 暗渠
(旧小田井用水)
 - H-I-J: とんまか通り
(古くからの商店街)
 - Iから西への道: 旧街道
(根来街道・淡島街道)
 - J: 粉河寺大門
 - K: 粉河寺本堂
(本堂北に粉河産土神社)
 - L: 粉河町矢倉墓地
(児玉家の墓地がある)
 - M: 乗蔵院
 - N: 須佐神社
 - O: 中山寺
 - P: 児玉家
 - Q-R-S: 小田井用水
 - T: 創カフェ
(旧山崎家住宅)

- <予定していた経路>
- 経路
 - A: 9時集合
 - A~K: アルファベット順
 - Kで昼休憩
 - K-J-L-J-I-M
 - M~T: アルファベット順
(R-Sは通行不能のため
鉄道沿いの道歩く)
 - T-A
 - 16時にAで解散

図1 計画していたフィールドワークの訪問地と経路
地理院地図をもとに作成。

- ⑤粉河町のまちなか (11-13 頁) : 江戸～明治期に描かれた「粉河寺四至伽藍図」と現在の地理院地図とを比較して、門前町の歴史を概観する。その後、とんまか通り (地点 H～J) には、粉河寺や粉河祭を説明するモニュメントが多いことや古い建物が残っていることを説明する。そのなかで、桃谷順天堂は、現在に続く老舗化粧品メーカーであることを話す。さらに、とんまか通りには電線がないが、これは景観保持や災害対策のほか、粉河祭で引くだんじりが電線にかからないようにする目的があることを説明する。<小早川・山口>
- ⑥粉河祭 (14-16 頁) : 粉河祭は粉河寺鎮守の粉河産土神社の祭礼で、紀州三大祭りの一つである。現在では7月最後の週末に開催されている。写真などを活用しながら粉河祭の概要を説明し、文書上でも中世まで遡ることができる歴史の古い祭りであることを示す。また、とんまか通りに設置されているモニュメントを活用して粉河祭の歴史を解説し、祭の担い手が変化してきたことを説明する。最後に、粉河祭の特徴であるだんじりについて、神輿とだんじりの違いや岸和田型だんじりとの比較を通して理解を深める。<尾崎・松本>
- ⑦粉河寺ってどんなところ? —粉河寺縁起と現地の様子から読み解く— (17-22 頁) : はじめに、「粉河寺縁起」(平安後期、国宝) や「粉河寺伽藍図」(室町時代) を参照しながら、現在の粉河寺の様子を概観する (地点 J～K)。その後、粉河の地名や粉河寺の縁起、童男会について説明する。次に、お寺の境内に鳥居があることに着目して神仏習合を説明し、粉河産土神社には地域担当制の神様といえる土地の守り神が祀られていること、神社の

背後の山から経塚が出土するなど和歌山県には経塚が多いことを説明する（地点K）。〈和田・呑原〉

- ⑧**児玉家の功績～児玉家のお墓から学ぶ～**（23-25頁）：まず、粉河寺境内にある猛山学校の跡地で、猛山学校の開設に陸奥宗光や児玉仲児が関わっていることを示し、児玉仲児の経歴や功績を説明した上で、彼が中心になった粉河騒動について説明する。その流れで、児玉仲児の息子で原敬の秘書官として活躍した児玉亮太郎の経歴や功績を説明する。次に、児玉家の墓地に移動し（地点L）、なぜ児玉家の墓地がこの場所にあるのか、地図をもとに考える。児玉家の墓碑の文字を片栗粉で浮かび上がらせ、現代語訳を説明する。〈小倉・渡辺〉
- ⑨**粉河の名家 児玉家の歴史を辿ろう**（26-29頁）：児玉家邸宅（地点P）の門が長屋門であり、児玉家の格式の高さやその利用法について確認する。次に、児玉家邸宅の建物の配置が紀北地方の典型例であることを説明する。その後、児玉家は、粉河寺の創建者である大伴孔子古を祖先にもち、室町幕府13代将軍足利義輝より「児玉」の姓を賜るなど、将軍家とも繋がりのある由緒ある家系であること、江戸時代には大庄屋として地域に影響力を持つ存在であり、それが明治期の児玉仲児や児玉亮太郎らの活躍に繋がることを説明する。〈辻・宮本〉
- ⑩**山崎邸を学ぶ**（30-33頁）：山崎邸（地点T）の塀が赤レンガ造りであることを手掛かりに、山崎邸の建設時期が明治～大正期と推定できること、その背景に関東大震災があることを説明する。その後、山崎栄助が綿ネルを生産・販売する粉河捺染起毛株式会社の取締役就任したこと、山崎家が財を成したこと、その背景として、日本での産業革命や第1次世界大戦があることを説明する。最後に、山崎邸の様々な意匠から、和洋折衷という近代建築の特性、レトロな雰囲気を活用した古民家カフェの人気などを説明する。〈大久保・齋藤〉
- ⑪**粉河の地図と河岸段丘の説明図**（34-43頁）：地理院地図（現在）、空中写真（現在）、陰影起伏図、治水地形分類図、地理院地図（現在）、旧版地形図（2000年、1967年、1934年、1908年、1886年）、河岸段丘説明図

4. 本共同研究の成果と課題

今年度の本共同研究では、中学生と一緒にフィールドワークを実施することはできなかったものの、教育実習を経験していない教育学部の学生が、中学生に伝えることを前提として教材研究を重ねたことの意義は大きいであろう。教材研究の内容としても、3で整理したように、時代として、古代に創建された名刹・粉河寺から現代のまちづくりまでを含むとともに、テーマとして、河岸段丘という地形、紀州三大祭りに数えられる粉河祭、和歌山における自由民権運動のリーダー・児玉仲児など、自然的なものから民俗的なもの、政治史的なものまで含んでいた。このような地域教材を完成させたことは、本共同研究の大きな成果といえよう。

ただし、本共同研究には多くの課題が残されている。ここでは、本番のフィールドワーク実施前に、学生の作成したワークシートを見て山口が指摘した課題を3点挙げておく。1点目は、学生が作成した当初のワークシートでは解説が一方的に行われており、話を聞いても記憶に残りにくい（生徒様の脳内がアクティブにならない）ものであったことである。2点目は、読めば答えの書いているワークシートになっているとともに、読む気を起こしにくい構成になっていたことである。3点目に、フィールドワークで現地を訪れているのに、現地・現物を出発点にしたストーリーや学習活動になっていないことである。

以上の課題が挙がる背景として、本共同研究でフィールドワークの案内役を務める学生の多くは教育実習を経験していない2回生であり、児童生徒の目線に立って解説することに注意を払うことができていないことが挙げられる。その点で、教育実習を経験した3回生は児童生徒を意識した教材作成を行っていた。教育実習前後での学生の差が垣間見られ、学生の成長力を感じた。今回の経験を踏まえた学生の成長に期待したい。その他、地域教材の作成における課題は昨年の本報告書（山神ほか2021）で詳述したほか、教材作成や実際にフィールドワークを行った学生や中学生の感想は2019年度の本報告書（山神ほか2020）に詳しいので、それらも参照されたい。次年度はコロナ禍も収まり、フィールドワークを実施できる状況になっていることを祈念する。

文献

- 山神達也・海津一朗・山口康平・川嶋里枝 2020. 貴志川線に乗っていこう！伊太祁曽神社と奥の院—地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」一、『2019年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』63-67頁。
- 山神達也・海津一朗・山口康平・川嶋里枝 2021. 地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」—熊野の果てまでイッテQ！～入口編～、『2020年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』217-220頁。